

ミリタリー、SFの可能性

——有川浩『図書館戦争』論——

越志 奈津樹

はじめに

『図書館戦争』は二〇〇六年二月から二〇〇七年一月にかけて本編全四巻と二〇〇八年に番外編全三巻が刊行された小説である。この小説は、図書館を題材にした今までの文学作品中で、最も深くまで図書館について調査を行い、図書館職員がクオリティの高さを評価した作品である。また、「図書館の自由に関する宣言」が引用されたこの小説は、発表直後に論議を呼んだ。

作者の有川浩は、高知県高知市出身の女性作家・ライトノベル作家である。幼少のころから作家を志して一度はその夢をあきらめたが、二〇〇三年に「塩の街 wish on my precious」で第一〇回電撃文庫ゲーム小説大賞を受賞し、デビューした。ライトノベルでデビューしたが、その後は一般文芸書籍と同様にハードカバーでの出版が続いており、電撃文庫出身の作家としては異色の存在といわれている。初期は自衛隊を題材にしたミリタリー・SF色の濃い作品を多く執筆していたが、二〇〇六年からは、ミリタリー色の無い恋愛や地域活性などを題材にした作品を手がけている。作中での恋愛が「ベタ甘」と称され、恋愛ものに定評があり、多くの作品がドラマ・映画・漫画・アニメなど様々なものにメディアミックスされている。

私がこの作品を卒論で取り上げたのは、有川の商品が好きで多くの作品を今まで読んできたことと、初めてこの作品を読んだ時に、全く武力とは無縁の存在と思っていた図書館が自ら武装し、不当な検閲と戦おうとすることに現実ではありえない設定が面白いと感じたからである。

本論では、ミリタリー、SFの要素から『図書館戦争』という物語の魅力について考えて

いきたい。なお、テキストの引用は文庫版『図書館戦争』、『図書館内乱』（二〇一一年四月二五日 角川書店）、『図書館危機』（二〇一一年五月二五日 角川書店）『図書館革命』（二〇一一年六月二三日 角川書店）、文庫版『別冊図書館戦争Ⅰ』（二〇一一年七月二三日 角川書店）、別冊図書館戦争Ⅱ』（二〇一一年八月二五日 角川書店）を使用する。論中では『図書館●●』（●頁）と表記する。次に先行論文・資料の紹介をする。

第一章 先行論文、資料の紹介

まず、飯田一史の「エンタメ・SF・ファンタジイの構造第2回「楽」と「哀」を満たすSF（？）作品——有川浩『図書館戦争』（1）では『図書館戦争』が日本人のエンタメのニーズやSF作品における物語の要素をどのように満たしているかについて論じられている。

日本人のエンタメにおける最大公約数的ニーズは「喜怖哀楽×共」であり、『図書館戦争』はその中でも「哀」と「楽」をよく満たしている作品である。「楽」とはポジティブでテンションの上がる要素であり、『図書館戦争』では主人公などのキャラクターのスペックを高くし、アクション・エンターテイメントの要素を出し、キャラクター同士の掛け合いをテンポよく出すことでキャラクターのテンションが高いことを示している。日本SF作品でもよく見られる手法である。一方、「哀」とは、「切ない」、「泣ける」といった心を揺らす要素である。読者の哀切に対するニーズに答えるために恋愛や家族の葛藤といった主人公たちの苦痛や困難の経験など等身大の悩みや焦燥感の吐露を描く。「楽」と「哀」を一つの作品内で満たすには、哀楽はセットで考え、感情の波（アップダウン）を作るように配置していく。序盤では、キャラクター同士の掛け合いやハイスベックな姿を見せることにより読者の「楽」を満たす。中盤では序盤と打って変わり、キャラクターの弱点や過去・葛藤を書き、「哀」が出るようにし、終盤ではその葛藤に対し凡人以上のアクションを起し関係や能力などを変化させて「哀楽」を満たしている。SFのジャンルニーズに関しては「壮かさ」、「謎めいている」、「知的」といったものをファンは求めている。「壮かさ」に関しては「表現の自由」

という大きくてわかりやすいテーマの設定や検閲の制度が挙げられる。「謎めいている」や「知的」の要素は、図書隊の敵であるメディア良化委員会の存在が挙げられる、しかし、作中ではこの組織に関する説明は全くと言っていいほどに無い。これは有川がメインプロットであるSFをあまり複雑化せずにサブプロットである恋愛に力を入れた結果である。倒すべき敵を倒した後に男女が接近する「勸善懲悪十恋愛話」にすることで読者の関心の散漫を防いだと述べている。

確かに、スペックの高いキャラクターの活躍には心躍る物もあり、SFという壮大な話でもSFの部分をおおく説明してないため、スムーズに読み進めることが出来た。飯田の考えも踏まえ、キャラクターの機能について次の章で考えたいと思う。特に自分で読んでいて近いと感じた主人公の笠原郁と、同期で同じ部隊に所属している手塚光について論じていきたい。また、『図書館戦争』シリーズにはSFの要素も含まれているので、SFの面からどのジャンルに分類されているか調べ考察していきたい。

次に小森健太郎は、「モノドロギーからみた『図書館戦争』」(2)で設定のおかしさをモノドロギーの観点から論じている。

この作品内では、戦争が生じる背景や設定が十分説得的に説明されておらず、異なる価値観がぶつかるといった対立軸が明確に持ち込まれていない。『図書館戦争』は、(島宇宙)に近い意味での(モノド)化した小共同体を描く物語であり、その戦いは、窓のない(モノド)が異物を排除しようとするところに生じているといえる。その(モノド)の内部は、『図書館戦争』で頻用される言葉を使えば、(自由)という名目で肯定され、その(自由)を侵す(検閲)者は対勢力として外部へと排除される。(モノド)的あるがゆえに、敵対者側には、普遍的な倫理が与えられず、脆弱な倫理しか与えられないのが特徴である。敵対している良化委員会は縁故・柵・金などが隊員たちをまとめ上げている組織であり、理念や志がない組織が現実的に存在しているかは疑わしい。『図書館戦争』内では、好きな本を自由に読むことが絶対的な正義とされており、それを外部から侵す検閲は絶対的な悪であると指定されている。作品が(モノド)的な相を推し進めていたとしても何ら問題はないが、『図書館戦争』

では、本好きの共同体を象徴している図書隊が銃を取って(検閲)と戦い、良化委員会に属する部隊員を撃っている。銃で撃つという行為は他者の抹殺を自らに許すことであり、意見の異なる別の(モノド)を認めないということにつながると述べている。

作中では、図書隊には強い信念や思いが感じられるのに対し、メディア良化委員会側に対しては全くと言っていいほどそれが感じられない。笠原が所属する部隊には元良化特務機関(メディア良化委員会の下部組織、検閲を直接行っている)の隊員がいる。その隊員や作中のメディア委員会の描写から彼らの正義とは何かについて論じたい。また、戦闘シーンを通して、図書隊とメディア良化委員の戦い方を比較して考えたい。

次に図書館の面から『図書館戦争』を研究した論文をとりあげる。藤間真・家禰淳一・志保田務は、『図書館戦争』シリーズの表現に関する『図書館情報学的考察』(3)で作者が図書館についてこれまで刊行された文学作品の中でも例を見ない深さで図書館関係の調査をしたことを評価する一方で、図書館に関しての誤解が世間に流布する可能性も考慮し、図書館情報学の立場から検証を行う必要性を論じた。

シリーズの世界と現実の対比では現実ではメディア良化法のような直接の検閲法はなく、図書館法に「図書館の自由に関する宣言」が含まれた条文はない。この宣言は図書館の根幹である知る自由を保障する理念が明文化された物であり、法的根拠はない。また、現代日本の図書館が武装する必要もない。検閲とは本質的には違うが、現行法に抵触する出版物の差し止め命令や、図書館自身を含めた関係部局から資料に関する指摘があった事例は幾つかある。また、図書館のドラマ性として、法体制に矛盾がある事を指摘している。検閲を許可した法律とそれに対抗できる法律が存在している矛盾があるがそれは国民の無関心が起因していると作品内で描写されており、現代日本への警告という見方もできる。図書館の自由の観点では、一九七九年に「図書館の自由に関する宣言」改訂のきっかけになった山口県立図書館での反戦・左翼系の本を段ボールに詰めて放置した事件がある。二〇〇一年には、特定著者の図書を廃棄した事件として、船橋市西図書館蔵書破棄事件が起こった。司書資格の取得法でも作中と現実では違いがある。作中では、司書資格を取るための公開講座が開催さ

れている描写があったが、実際は文部科学大臣が委嘱する「司書講座」などで「公開講座」とされるのは違うといった現実と作中での図書館の違いや現実に起きた事件について述べられている。

現代の日本の表現に対する国民の関心は作中の日本国民同様にそこまで高いものではないだろう。表現に関する日本でもこれまで起こった事件について調べ、論じていきたい。

次に、作者がこの作品を書くきっかけになった「図書館の自由に関する宣言」についての研究した論文についてとりあげる。安里のり子・アンドリュー・ウェルトハイマー・根本彰は「小説『図書館戦争』と『図書館の自由に関する宣言』の成立」(4)でどのような経緯で「図書館の自由に関する宣言」が成立したかや成立当時の時代背景が述べられている。

「図書館の自由に関する宣言」は、戦前に思想善導機関として機能していた図書館の歴史を反省するために一九五三年に埼玉県図書館協会が「図書館憲章案」として提案したものが元になっている。一九五四年に図書館大会および日本図書館総会で激論の後に採択された。「図書館の自由に関する宣言」は主文と各項に説明を加える副文から成り立っている。宣言の本文自体が物語構造を内包しており、それは図書館の業務を行うときに内外との関係で生じるものである。成立の際話し合った当初主文中の最後の文は「図書館の自由がおかされる時、われわれは団結して抵抗し、関係諸団体との協力を期する」という内容であったが「抵抗」という語句は地方の弱い組織は「抵抗」ではなく「拒む」が良いと考え、また県の理事者や市の理事者に「抵抗」がどのような強い響きを持って伝わるかを考慮したと述べている。作者は、この宣言が極限の状態で用いられるようになったらどうか、という想像力の元にこの長編小説を書き上げた。作中人物のこの宣言に対する考え方から、改めて作者のこの宣言に対する考えを考察していきたい。

第二章 物語解析

*キャラクター解析

この章では、物語の解析をしていきたい。最初に物語の流れを説明する。小説内の世界は一九八九年の改元に際して昭和から平成ではなく「正化」という年号になった仮想日本である。「正化」は平成のほかに挙げられていた候補である。郁が図書館に配属された正化三年(二〇一九年)から物語は始まる。

主な登場人物は、主人公の笠原郁(以下郁と表記)、郁の元教官で班長の堂上篤(以下堂上と表記)、同じく元教官で副班長の小牧幹久(以下小牧と表記)、郁と同期で同じ班の手塚光(以下手塚と表記)、郁と同期で寮の同室の柴崎麻子(以下柴崎と表記)、郁が所属する図書特殊部隊(ライブラリー・タスクフォース)の隊長玄田竜助(以下玄田と表記)、玄田の元恋人で『週刊新世相』の記者の折口マキ(以下折口と表記)、図書館の設立に貢献した稲嶺和市(以下稲嶺)である。

まず、キャラクターの機能について考える。郁の恋愛の相手となる堂上は、郁が堂上に助けられたことをきっかけに図書館隊を志し、その後も郁は堂上と同じような行動をとっている。郁の目標と成り郁を引っ張っていく機能がある。手塚は、主人公と切磋琢磨する仲間であるため、ライバル関係にあるといえよう。また、二人とも家族内に確執を抱えているので、同じような立場である。その事については別のところで詳しく述べる。柴崎は切磋琢磨というよりは、郁を見守り、導いていく立場にある。また、郁にはあまり描写されていない女らしさや色気、郁が持っていないツテなどの情報収集能力や明晰な頭脳を持っており、郁とは対極の立場にあるといえる。柴崎も郁が自分とは対極の存在であると認識している。柴崎は人に寄り添おうとする郁に対し、人付き合いのコツは相手を信頼しないことだと持論を述べている。

一方、堂上の対極の立場にあるのが小牧である。小牧と堂上は図書大学時代から切磋琢磨する関係にあり、直情型の堂上に対し、小牧は正論を武器としているので論理的な考えを持つている人物と言えるだろう。小牧は熱くなりやすい堂上を止めるストッパーの役目を果たしている。郁に対しても同じような役目を持っているといえるだろう。

玄田は、豪放磊落な面を持った男であり、部下の自主性を重んじるところがあり多くの部

下から慕われている。懐も深く情に厚いところも部下に慕われる要因だろう。堂上や郁を導き助ける役割を果たしている。

稲嶺は、図書館を創設した人物であり、郁の思想に大きな影響を及ぼす一方、障害者としての面を持つている。彼は作中で図書館創立のきっかけになった「日野の悪夢」と呼ばれる事件で妻と自身の右足を失くしている。『図書館戦争』では、初めて郁が稲嶺と対面した時にこのような場面がある。

「行先までお手伝いしますよ」

「いや、結構。車いすも自走式ですし、一人で行けますのでお気持ちだけ」

遠慮しなくてもいいのに。首を傾げた郁を諭すように男性は笑った。

「利用者にもサービスを取捨選択する自由があります。お分かりいただけますかな」

『図書館戦争』（五〇頁〜五一頁）

郁がエレベーターに乗ろうとしている稲嶺を見つけた際のやり取りであるが、郁が手伝おうとしているのに対し、稲嶺は郁の押しつけがましいサービスをそつと諭している。此処で郁はおそらく「手伝ってあげようとしている」という考えを持つている。障害者に対し寄り添い、手を貸すのではなく上から目線で接しているのではないだろうか。

また、稲嶺と同じ障害者という立場では中澤毬江という少女がいる。毬江は中途難聴者であり、彼女と同じ立場のキャラクターが登場する本を小牧が薦めたところ、障害者に対する差別であるということで良化特務機関から査問にかけられる。本のこと知れ渡ったのは、毬江の同級生らから毬江にその本を薦めたのは無神経ではないかとという噂が広まり知られたのだが、毬江は、郁達と乗り込んだ査問会場で、委員に向かって次のような問いかけをしている。

「私がこの本を楽しんだことをなんで差別だなんて言われなきゃいけないんですか？せ

つかくの楽しかった気持ちが台無し。私にはあなたたちが一番私の耳のことをさべつしたがっているとしたか思えません。だって私はこの物語の主人公にすごく思い入れして読んでたのに」

「障害を持つていたら物語の中でヒロインになる権利もないんですか？私みたいな女の子が恋愛小説の主人公になってたらおかしいんですか？私に難聴者が出てくる本を勧めるのが酷いなんて、凄く難癖。差別をわざわざ探してるみたい。そんなに差別がすきななの？」

『図書館内乱』（一四一頁）

ここでは、毬江が自分たちが思っているような障害者ではないと感じた査問委員が苦々しげな表情をしていることが述べられている。障害者を差別していると批判しているが、一番差別をしているのは委員であると描写されている。

私たちが障害者に対し思っていることが、良かれと思っている事でも実は障害者にとっては差別になっているということを稲嶺や毬江というキャラクターは述べている。郁の障害者に対する考え方を変えると同時に、読者にも障害者について考えさせる機能を持つているのが稲嶺であり、毬江はないだろうか。

次に、折口マキである。折口は、『週刊新世相』という雑誌の記者で自身もメディア良化法には反対の立場である。元恋人の玄田とは悪友のような関係であり、外部からの情報を持つてきては手助けをしている。

柴崎、毬江、折口の三人の女性は、いずれも戦いに直接は参加しておらず、情報のみで手助けをしている。この三人には女性が戦いに直接参加することの特異さを示し、郁の勇ましさを強調する機能があると思われる。

*郁と手塚

次に、前述した郁と手塚の相同点について論じていきたい。郁は母親との確執が、手塚は兄との確執がそれぞれ存在する。

まず、郁と母親との確執について考えたい。郁の家族構成は、両親と二人の兄と郁の五人家族である。「図書館危機」では、郁の二番目の兄が母親を「浮世離れた存在」と述べており、お嬢様のような性格をした人物であると述べられている。郁の母親は、幼少期に郁に降りかかった出来事から郁に「女らしさ」を強制する。郁はそれを知らず反発し、中学から大学まで陸上部に所属したり、髪を短髪にしたりと母の求める「女らしさ」とは対極の自分を作り上げていく。母親は図書隊に郁が所属することに對しても初めは反対しており、郁は自分が戦闘職種に就いたことを両親に何の報告もしていない。三巻の『図書館危機』で茨城の図書基地の女子の確執に巻き込まれ、両親に戦闘職に就いたことが露見してしまう。ここで初めて郁は母親と衝突する。郁は母親が何故自分に女らしさを強要したのかを知ることになる。和解には至らないものの、母親も郁もそれぞれが考えるようになる。「別冊図書館戦争」で郁は柴崎に自分が気付いていなかった母親の「マインドコントロール」について指摘される。

「あー、でも先に指摘しとく。何であんたがそんな複雑怪奇な貞操観念に縛られてるか」

郁が首を傾げるとベッドの隣に座ってくれた柴崎が郁に指を差した。

「ずばり、お母さんの呪縛」

ぎくりと身体が硬直したのは、思い当たる節があったからだ。

「女の子はキレイな体でお嫁に行きなさいとかあんたのお母さんいかにも言いそう。」

婚前交渉何てとんでもありません、みたいな」

「で、でもあたしそんなの真に受けてなんか」

「ホントに？彼氏にキス以上をねだったらふしだらだと思われて嫌われないか、とか

バカな不安持ってない？」

あつさり言い当てられて郁は沈黙した。

『別冊図書館戦争』(一三五頁)

このやり取りは、堂上と郁が付きあつてからしばらく経ち、郁が堂上に性的な行為をさせようになるが、怯えてしまうことを柴崎に相談した時のことである。郁は無意識ながらも反発してきた母親に縛られている自分がいることを気づいていたが、柴崎からの指摘で本格的に向き合わねばならなくなった。その後堂上ときこちなくなってしまう、郁は焦るが勇気をだし、自分が堂上に触れてほしいことを告げ、母親の呪縛を少しではあるが解いた。

また、結婚式のエピソードでは郁と堂上の出会いについて母親が知ることになり、母親は堂上を「王子様のように」と表現している。これは、かつて自分を助けた堂上を「王子様」と呼び尊敬していたこともあり、郁と母親は反発をしながらもやはり親子であることを窺わせるエピソードになっている。また、郁は恋愛には奥手な所もあり仲間の女子からは「純粹培養」とからかわれているがそれもおそらく母親の影響が大きいだろう。

次に手塚である。手塚の家族構成は両親と兄の慧、手塚の四人家族である。皆図書館にかかわる仕事をしており、父親は図書館長、慧は図書一正と家族そろって図書館の仕事についているが、父と手塚と慧は意見の対立から決別し、慧は『未来企画』というグループのリーダーとして活動する。その為に母親が精神を病んでしまい、家庭崩壊と似た状況に追い込まれ、兄を信頼していた手塚は裏切られたと感じ、兄を憎むようになる。

手塚は嫌いになろうとするが一方では嫌いになれないという葛藤で苦しんでいるが、柴崎の助力で和解への道を歩みつつある。

また、郁と手塚は堂上に憧れ、目標にしている描写がある。郁は自分を助けてくれた「王子様」を始め堂上とは知らなかったが堂上を追いかけている描写があり、また、手塚も『図書館戦争』で郁が堂上に目を掛けられていたのを気に入らず、郁にきつくあたる場面や兄の慧に似ているから、堂上に憧れているという面がある。また、両者ともに物語中で大きく成長し、それぞれが支えとなる伴侶を得ている。堂上の心情の描写や堂上が過去の自分に郁を

重ねていることから、もう一人の主人公は堂上であるという見方ができるかもしれないが、郁と同様に家族との確執や自身の過去と決別した点から考えて、この物語は郁の成長だけでなく手塚の成長も柱の一つであり、手塚は郁と並びもう一人の主人公であるといえるだろう。

*「図書館の自由に関する宣言」

次に、作中の人物の「図書館の自由に関する宣言」への発言や考え方から作者の「図書館の自由に関する宣言」に対する考えについて論じていく。

作中では図書館法全三章に付属する第四章として「図書館の自由に関する宣言」が入っているという扱いになっている。

図書隊内では、図書館の原則と独立を重視する「原則派」と図書館は行政のコントロール下に置かれるべきだと考える「行政派」の二大派閥が存在する。

慧は第三の派閥と言われている「未来計画」のリーダーであり、検閲をなくすためには図書館をメディア良化委員会と同じ国家機関にまで地位をあげようとするが、その為には「図書館の自由法」を削らなければならない。手塚の父は図書館が検閲に与したという歴史を作りたくないという反対し、慧は家を出て行ってしまふ。

慧の計画を聞いた郁は、次のように慧に述べている。

「……何十年かしたら、検閲がなくなるから、それまで検閲を我慢してろって、あたしは他の人には言えない」

やっと言いたいことのシツポを捕まえた。

「読みたいのは今なんだもの。何十年後かの自由のために今ある自由を捨てるとか言えない」

(中略)

読みたいのは数十年後の未来ではなく今だ。

『図書館内乱』(三三九頁〜三五〇頁)

郁は、何年後かの未来のために検閲に屈して自由を手放すのではなく、今の自由が大事であると述べている。

「図書館の自由法」のもとになった「図書館の自由に関する宣言」は一章でも述べたが戦時中に検閲などの国家権力に屈してしまった教訓から、作成されたものであり、それだけ図書館の独立性を守ろうとする強い意志が込められた宣言である。

また、作中で引用されている「図書館の自由に関する宣言」では、四つ目の項目に「不当な」という言葉が付け加えられている。実際にも「不当」という言葉は使われていたが、検閲は皆不当であるとの考えから、この語句は削られた。この削られた語句を作者が再び付け加えたのは、この宣言をより厳格なものにしたからではないだろうか。

*良化特務機関の正義

作中では、郁の所属する図書隊の実状が描かれることが多いが、対極的に敵である良化特務機関にはスポットが当てられておらず、彼らが自分たちの行っている検閲をどのように捉え、考えているかが作品からは全くといっていいほど伝わってこない。番外編の『番外図書館戦争』では、過去に良化特務機関の隊員であり、現在は図書特殊部隊の副隊長である緒方のエピソードがある。有川は本編で良化特務機関の描写が全くないことについて次のように語っている。

まず、良化委員会側の言い分が書かれていないことを指摘するご意見を今までいくつか頂きましたが、これは敢えて書いていません。その理由もここでは述べません。

『図書館革命』(三五四頁)

作者は、何故作中で良化委員の立場に言及していないか自身の考えを述べるつもりはなく、読者の想像に任せるような言い方をしている。

緒方が良化特務機関に配属されたのは国家公務員試験を受けたことからだった。緒方は配属された当初は国民に嫌われる嫌な部署に配属されたという印象しか持っておらず、メディア良化法が何を狩っているのかわらなかつた。当時緒方には付き合っていた女性がおり彼女の夢は作家になることだったが、緒方が彼女に良化特務機関への配属を隠しており、彼女の小説が載った雑誌が検閲の対象になり没収されたことから緒方は彼女に良化特務機関に勤務していたことを知られ、彼女からいかにメディア良化法が悪法であるかを教えられる。彼女との仲が破たんした後、緒方はメディア良化法について考え、そして今度は自分が本を守る立場になることを決意し、図書隊へ志願したのであった。

この緒方のエピソードは、数少ない良化特務機関の隊員達の実状がわかる内容になっている。作中では良化特務機関に所属している隊員は図書隊の隊員とは違い、検閲に対する情熱や検閲をどう思っているかなどの描写がなく、自分を持たない烏合の衆で、団結力もさほど高くないような印象を受ける。上官は恋人の作品を検閲から守ろうとした緒方に対し、次のように述べている。

「このくらいで躊躇しては委員会へは上がれんぞ」

隊長は厳しい口調で説諭した。

「省庁や国内は綺麗事では動かん。我々は掃除屋だ。世間が我々をどう罵ろうと罵られることで保たれる秩序がある。その事に誇りを持って」

『別冊図書館戦争Ⅱ』（二八頁）

この台詞から出世を第一に考え、保身が大事だと考えていることが読み取れるがその一方で上官は、自分たちが検閲を行うことによって守られる秩序があると言っており、自分たちが必要悪であるような言い方をしている。

本編では、高圧的で権力を振りかざしているようにしか思えなかったが、この台詞から自分たちの仕事に世間からはどう見られていても誇りをもって取り組んでいると考えている

ことが窺えた。

作中では、主にメディア良化委員会の協力団体が出てくることが多く、図書館の前でデモを行ったり、『図書館内乱』のように襲撃してきたりと良化特務機関よりもメディア良化法に賛同する団体からの攻撃が多いように作中から読み取れた。

作者があえて自身の考えを述べず、また本編で良化委員会側の考えを描写しなかったのは、人間関係をあまり複雑にさせず、読者に検閲や言論・表現の自由を分かりやすく述べるである。自身の保身ではなく、あくまで図書館の自由、言論の自由を守ろうと立ち向かう図書館側に対し、良化特務機関は国家権力を振りかざす悪の組織のように描写されていて、小森が述べていた「正義の味方」としての図書隊をより明確にする為に本編では何も言いつを書かなかった。

しかし、図書隊の正義が言論、表現の自由を守ることにあるのなら、良化特務機関の正義は、国民からどんな目で見られようと罵られようと自分達が信じる秩序を守ることである。

第3章 調べ系

*パラレルワールドとディストピア

この作品をジャンル分けすると、SFの中のパラレルワールド、ディストピアの二つのジャンルに分類される。

はじめにパラレルワールドについて説明する。本来のパラレルワールドの定義は、我々のいる宇宙とは違う宇宙が複数存在し、それぞれで異なっている歴史を辿っているというものである。しかし、私たちがよく目にするパラレルワールド物では、違う世界にいる自分たちと対峙するものが挙げられる。近接するサブジャンルにはオルタナイト・ヒストリーがある。

この作品の舞台は、前章でも述べたが改元の際に平成でなく「正化」という年号になった

架空日本である。現実では、平成改元の時に「修文」・「平成」・「正化」の三つが最終候補に残ったが、「平成」以外の二つは、ローマ字の頭文字で表記する時に昭和と被ってしまうという理由から外され、「平成」が選ばれた。また、西暦に換算すると物語の始まりは二〇一九年である。

もう一つのジャンルは、ディストピアである。ディストピアは反ユートピア、アンチ・ユートピアなど様々な名称があり、ユートピア（理想郷）思想から生まれた概念である。SFでは空想な未来世界が描かれる。ディストピアを描いた有名な作品ではハクスレイの『素晴らしき新世界』（一九三二年）やオーウェルの『1984』（一九四九年）、焚書を取り上げたレイ・ブラッドベリの『華氏451度』（一九五三年）などが挙げられる。

一九二〇年代にソビエト連邦の誕生やファシズムの台頭を契機に多く描かれるようになった。SF作品でのディストピアの要素について新田将久は次のように述べている（5）。

それぞれの作品に共通する要素はまず、舞台を未来に設定しているという点である。これは現在の世の中に存在しない状況や技術を用いて社会や体制を描こうとする試みから生じる共通点であると考えられる。さらに、戦争が何らかの形で含まれることも、共通点としてあげることができる。

（中略）

ディストピア要素「管理」は、管理・支配の両方のニュアンスを合わせ持っている。

新田は、ディストピアの要素については時代設定や世界背景にも特徴があり、また世界が管理されているがその管理は、唯の管理ではなく、支配性も併せ持っていると述べている。作中では、改元や年代については特に言及されておらず「正化」という年号にした意味や重要性は作中からは読み取ることが出来ない。

この事から、作者はパラレルワールドや設定を未来にしたことには特に重きを置いておらず、パラレルワールドにはあまり重要な意味はないと推測し、ここではディストピアの観

点から新田の述べていたディストピアの要素が『図書館戦争』シリーズに含まれているか調べ、ディストピアとして新しい試みを行っていないか考察していきたい。

まずは年代である。「正化」という架空の年号が使われ、出版された二〇〇六年から考えると二〇一九年は遠い未来であると言える。新田が述べていた「現在の世の中で存在しない」メディア良化法や図書館の自由法が存在しているが、科学技術は『図書館革命』で携帯電話が大雨で使えなくなる描写や、郁が暗号代わりに誕生日を祝う電報を送ったりしているのが、科学の文明レベルは現代の私たちとは大きな違いがないだろうと推測する。

次に戦争である。題名が『図書館戦争』であることから戦争を明らかに意識しており、作中では検閲を行うメディア良化法と検閲に対抗して図書館の自由を守る図書館の自由法の戦争が繰り返されている。稲嶺が『別冊図書館戦争II』で「戦争は終わらない」と発言しており、当事者たちもこれが戦争であると認識している。

また、管理ではメディア良化法、良化特務機関という権力によって言論や表現が弾圧され厳しく制限・管理されている。しかし、メディア良化法が完全に弾圧しているわけではなくそれに対抗する図書館が存在しているので完璧な管理とはいえない。

また、他のディストピア作品を見ると、主人公が初めは管理する側において管理することに対して何ら疑問を抱いていないことが多い。物語中で自分が置かれていた状況や政策について疑問を持ち立ち向かっていくというパターンが多い。それに対し、郁は高校生の時に検閲を行う良化隊員に本を守るために立ち向かうなど初めから規制には反対の立場であり、そこが他のディストピア作品との違いであるといえるだろう。

これは、作者が後に述べる東京都青少年健全育成条例改正案に対し反対声明を出している事や、規制を行う側の言い分ではなく、規制に対し立ち向かう側の言い分を述べたことからである。

また、メディア良化委員会は図書館と違い、法務省の傘下にあるいわば国家機関である。その大きな権力を持つ巨悪に立ち向かう主人公という格好良く凛々しい面も出し、主人公たちの正当性を強調したかったとも考えられる。

しかし、ディストピアという一見暗いイメージが漂うジャンルではあるが『図書館戦争』シリーズではキャラクターの掛け合いなどで物語がテンポよく進み、暗さが全く感じられない。一見難しそうなテーマを軽くまた分かりやすく知ることが出来ることもこの作品の魅力の一つであろう。

*作中の装備

郁の所属する図書特殊部隊では、当然ではあるが戦闘が多いために武器の描写も多い。此处では、作中に登場する武器から良化特務機関と図書特殊部隊の装備の違いや特徴について考察する。

初めに銃火器についてである。図書特殊部隊が使用している銃は六四式七・六二m小銃、八九式五・五六m小銃、九m機関拳銃、SIGP二二〇である。良化特務機関の部隊、良化隊が使用しているのはMP5サブマシンガン、狙撃銃である。それぞれの特性について説明していく。

六四式七・六二m小銃は、昭和三七年から研究開発され、三九年に仮制式になった国産銃である。全長約九九〇mm(約九九cm)、重さ約四・四kg(脚付・弾倉除く)である。郁が『図書館戦争』冒頭の訓練時に抱きかかえてマラソンする描写があり、軽量、小型で日本人の体格に適しているのが特徴である。発射速度は一分間に最大五〇〇発である。

八九式五・五六m小銃は、六四式小銃の更新近代化用で、平成元年からライセンス取得を開始している。固定銃床型と空挺隊員や戦車隊員用の折り曲げ銃床型の二種類がある。作中で使われているものは、前者だと思われる。全長は固定銃床型の場合は約九二〇mm(約九二cm)、折り曲げ銃床型は約六七〇mm(約六七cm)、重量は両方向同じく三・五kgである。発射速度は一分間に最大八五〇発である。これは訓練生が持つことはできず、隊員のみが持つことが出来る。

九m機関拳銃は、空挺部隊の指揮官、部隊装備火器操作手の自衛用の銃である。防衛省は略称をM九、愛称を公募から選ばれたエヌナインとしている。全長三九九mm(三九・九

cm)、重量二・八kg、一分間に約一一〇〇発の発射速度を誇る。

SIGP二二〇は、スイスのSIG社及び当時傘下であったドイツのザウエル&ゾン社が一九七六年に共同開発した警察及び軍用拳銃である。自衛隊では長野県のミネベア社がライセンス生産を行い、一九八二年に「九m拳銃」の名称で制式拳銃に採用された。

MP5サブマシンガンは、警察用や公安用に使われる銃である。公安用にと考えられた結果、初弾の命中率が高いものが選ばれた。全長約六六〇mm(約六六cm)、重量二・八kgである。三二発装弾することができる。射撃に使われることが多く、作中でも良化隊は狙撃をしていくことが多い。

狙撃銃は様々な種類があるが、日本で実際に使われているのは、豊和M一五〇〇である。警察で用いられている。国産では唯一の大口径ボルトアクションライフルであり、豊和工業を代表するライフルとして、日本のみならず世界各国で販売されている。M一五〇〇は本来狩猟用の銃であるが、警察ではバースメントハンティングモデル(害獣駆除仕様)が採用されている。全長は一八〇〇mm(一八〇cm)、重量は三・四kgである。

図書特殊部隊の銃の弾丸は弱装弾となっているが、良化隊の銃に関してはとくに記述がない。銃火器を図書隊が装備したのは良化特務機関の装備が攻撃力の高いものに変化していたためであるため、もし実弾であるならば、図書隊よりも強力な装備を持っており、殺傷能力の高い武器を持っていることが分かる。

次は、銃以外の装備である。無線機などの記述があったが、何が使われているかを特定することが困難であったため、ここでは図書隊が使用していたUH-60JAヘリコプター、図書特殊部隊と良化隊の戦闘服について述べる。

UH-60JAヘリコプターは、機動力があるので空中機動作戦や災害時の派遣に使われているヘリコプターである。アメリカでは「ブラックホーク」の名前で知られており、映画の題名になった人気のヘリコプターである。日本では三菱重工業がライセンスを取得し製造している。パイロットと乗員合わせて一四人が乗れる大型のヘリコプターである。

戦闘服の描写は少ないが、色はオリーブ色であることや迷彩柄についての記述がないので

はつきりとしたことは言えないが、表紙裏の挿絵から陸上自衛隊の戦闘服に似ていることが分かる。良化隊の戦闘服は紺色であるという描写から、良化隊の戦闘服は警察特殊部隊の制服に似ていると推測する。

今まで説明してきた図書特殊部隊の装備は、全て陸上自衛隊が実際に装備しているものである。装備の説明には自衛隊から払い下げされた物を使っているという描写があった。それに対し、良化隊の装備は多くが警察の物に酷似している。自衛隊の装備をした図書特殊部隊と、警察の装備を付けた良化隊の戦闘が描かれているのである。

ここで、図書隊と自衛隊の接点について考えたい。「図書館革命」では、自衛隊が図書隊に協力し、良化隊が持っている銃を使えなくするというエピソードがあった。また、前述したが、装備を自衛隊が使っていたものを使っていることや良化委員会に協力する描写が作中にないので、自衛隊と図書隊は親密な関係にあると思われる。また、作者はこの作品を書く以前に『塩の街』『空の中』『海の底』の「自衛隊三部作」と呼ばれる作品を、『図書館戦争』以降は、『ラブコメ今昔』、『空飛ぶ広報室』と自衛隊に関する作品を出版している。また、有川は自衛隊について多く取材をしていることでも有名である。インタビュー記事で有川は、自身の描く自衛隊や自衛隊不要論を掲げている人について次のように述べている（6）。

自衛隊を扱った小説は今までもたくさんありましたが、男性作家さんは興味の方向が装備や作戦に行かれるようで、重厚でハードな物語を得意とする方が多いですね。

私の場合は、装備を使う人や手入れをする人など、装備にかかわる人たちのほうに興味が行くので、そういう部分をずっと書いてきました。日常や恋愛などのソフトな部分ですね。彼らは「隊員のことを知ってほしい」とよくおっしゃるので、彼らの隠れたニーズに応えることができたのかもしれない。

現実でどれだけ自衛隊に対して公平な発言があってもそれはスルーされるのに、フィ

クションの中自衛隊が「叩かれる」描写をしたら、叩く側を飛ばして批判がなされる。その時点で、自衛隊は差別されていると思います。「彼らを差別する人はいっぱいいるんだから、彼らの味方でいる人が少しぐらいいたっていいじゃないか」と思うので、私は何を言われようとも、これからもそういうスタンスで書き続けたいと思います。

たとえば、「自衛隊なんか大っきらい」という論陣を張る方には、「自分は有事の際であつても自衛隊の救助は受けません」と宣言してから自衛隊不要論を掲げていただきたい。たとえ自分の家族が窮地に陥っても、それに対して「救助を拒否します」とね。

（中略）

「自衛隊が嫌い」とおっしゃる方に対しては、「自分一人の問題ではなく、自分につながるすべての人に対して、そこまで言える覚悟をしたらうえでおっしゃってください。それでも自衛隊はあなたたちを助けますから」と言いたいですね。せめてそこまで覚悟して発言するのが「嫌う誠意」だと思えます。特に社会的な影響力のある方は。

（中略）

自衛隊を賛美しろとは言いませんけれども、自衛官たちの覚悟はわかっています。自衛隊を悪し様に言う人たちのために、彼らはいざというとき命を落とす覚悟を持っているということを、私たちは公平に胸に刻んでおくべきだと思います。

この談話は、有川が『図書館戦争』シリーズ以後に書いた『空飛ぶ報道室』に関する物である。有川は今までにいくつも自衛隊を題材にした作品を出版してきたが、この作品を書くために二年半の取材を行ったという。有川の発言からは自衛隊に対する敬意が見て取れる。また、自衛隊は不要であると発言に対しては自衛隊の力は借りないというくらいの誠意が必ずやであると述べている。

確かに、自衛隊を題材にした作品に多い装備や遂行する任務や作戦の説明は、有川の他の作品でも少なく、その分自衛隊の人々の心情の描写や任務に対する姿勢、自衛隊の内情など

が書かれ散ることの方が多い。有川の描く人々は戦闘機の整備士や、自衛隊のトイレのメーカーなど他の作家は余り題材にもしないだろうという人びとにスポットがあてられていることが多く、自衛隊員の恋や葛藤について描かれている所がリアリティがあり面白いところでもある。また、有川の描く自衛隊は大物作家からよく批判されることが多い。しかし、有川の作品は読者に自衛隊は生身の人間がいて、私たちと何ら変わりなく葛藤したり、恋愛したりすることを教えてくれる。読者が自衛隊に興味を持ち、自衛隊について考えることに有川の作品は一役買っていると言えるだろう。

装備が似通っている点で出版された近辺で自衛隊に関連する出来事を挙げるとすると、『図書館戦争』が出版される以前には陸上自衛隊のイラク派遣がニュースで話題になっていた。

やはり、反対する意見も多かったものの、自衛隊の人々ほどの国の軍よりも現地の住人と親密な友好関係を築き、地域の復興などに貢献したという。そのことも作者は意識したのではないだろうか。

良化特務機関の装備が警察のものと酷似していることは先ほど述べたが、有川が警察に関して負の感情を持っているという内容のインタビュ記事やあとがきなどの発言が見つからなかったため、単に図書館と区別するために警察の装備を使ったものと考えられる。また、『図書館戦争』で稲嶺がメディア良化法に賛同する団体に誘拐された際に警察が図書隊に協力している描写や装備が警察から下げ渡された物も装備の中にあるとあったので、警察を「悪」として描いてはいないと考える。

小森が言っていた作中の「正義の味方」である図書特殊部隊に自衛隊の装備をさせたことで、自衛隊を正義の組織として描きたかったのではないだろうか。

*『図書館戦争』以降の自衛隊

自衛隊で話題になったことを挙げると、近年特にみられるようになった自衛隊の『萌えポスター』について触れたいと思う。徳島県の自衛隊の募集ポスターがいわゆる萌えキャラが

書かれたものになっておりネットで話題になっていた。また、私の家には昔知人に貰った陸上自衛隊の戦闘服を着た萌えキャラの書いてある乾パンが非常食として置いてあった。初めて見た時は、自衛隊らしからぬキャラクターでとても驚いた。

国防に関わっており、堅いイメージがある自衛隊だが、美少女のイラストなどを採用することによってそのイメージが払しょくされている。

サブカルチャーでは、萌えキャラとミリタリーを組み合わせた「萌えミリ」というジャンルが登場しており、例を挙げると戦艦等が擬人化され育成するゲームで昨年大変話題になった『艦隊これくしょん』（二〇一三年）や戦車を少女たちが使う『ガールズ&パンツァー』（二〇一二年）が挙げられる。どちらも可愛い少女たちが凛々しく戦うという共通点があり、自衛隊の萌えポスターにも通じると考えた。

*メディアの事件

作中では、本に影響された中学生が郁たちの業務を妨害するという出来事があった。現実でも本等のメディアに影響されて起こしたと思われる事件が存在する。ここでは、実際に起きた事件から作中で良化委員会が行っている検閲について考察していきたい。

メディアの影響を受けて起きたと報道された事件で特に話題になったのは、一九八八年〜八九年に起きた東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件と二〇〇七年に起きた京田辺警官殺人事件である。

東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件は、東京都西北部及び、埼玉県南西部で発生した幼女を対象にした事件である。四歳〜七歳までの幼女がターゲットにされ、犯人の宮崎勤の行動の異常性が大きな問題になり連日多くのメディアで報じられた。宮崎は殺害後の幼女の死体に性的な行為をする様をビデオ撮影し保管していた。その他にもアニメや特撮もの、ドラマなどのビデオを多数所持しており、中でも残虐な描写が多く、グロテスクなスナッフ・フィルム仕立ての「ギニーピッグ2 血肉の華」（一九八五年）とコメディー調であるがやはりグロテスクな描写が多い「ギニーピッグ4 ピーターと悪魔の女医さん」（一九八六年）等、

約八三本のホラー・スプラッター映画のビデオが押収されたことを大々的に取り上げた。そしてこの事件がそれらのビデオが影響で起きたかのように報じたのである。その影響で「ギニーピッグ」シリーズは廃盤に追い込まれ、全国の劇場でホラー映画の放映が自粛されるようになった。宮崎は警察の取り調べに対しホラー映画からは影響を受けていないと述べており、メディアに大きく取り上げられた「ギニーピッグ2 血肉の華」は見えていないと述べている。また、この事件がきっかけでオタク的な趣味を持つ人々がいかにも犯罪者予備軍であるかのように見られ、差別されることが多くなった。

次に二〇〇七年に起こった京田辺警官殺人事件である。当時一六歳の少女が警官である父の首を斧で切断し殺害したものである。作中で殺人を行うシーンがあり、事件と似ているという理由からアニメ『School Days』（二〇〇七年）や『ひぐらしのなく頃に』（二〇〇六年）が一部地域で放映中止となったり放送局が放送を自粛するまでになった。一部のメディアでは首を切断して殺害するシーンや、凶器が鉈であったりすることから「ひぐらしのなく頃に」が事件のモデルになったのではないかといわれたが、少女がその作品を好んで読んでいて、そこから影響を受けたことを示す確かな根拠は無い。また、二〇〇八年に青森県八戸市で起きた、少年が母親・妹・弟を殺害した事件でも、押収品の中に「ひぐらしのなく頃に」があり、話題になった。少女は父親の女性関係に日ごろから不満を抱いており、ギロチンにしたと述べている。その後他の地域でも、この事件を模倣した事件が何件も発生し話題になった。

以上のことを考えると現実での放送の自粛などは凶悪な事件が起きてから行われていることが分かる。実際にそのメディアの影響を受けて事件が起きたかどうかは定かではないが、事前に防止することを考えるとメディアの悪化委員会が行っている検閲は、事件を予防する上では大いに有効であると言えるだろう。しかし、これらが事件を起こしたという根拠は無く二つの事件ともメディアが勝手な推測を報道し、事件のモデルや被告の趣味などから勝手に結びつけられたということも大きいと考える。

また、表現の自由という観点で話題になった児童ポルノ法についても考察したい。

児童ポルノ法は一九九九（平成一一）年五月二六日に公布、同年一月一日に施行された。なお、二〇〇四（平成一六）年、附則六条に基づき、改正案が成立している。二〇〇八年に単純所持規制と創作物規制の検討を盛り込んだ与党改正案が提出され、二〇〇九年に児童ポルノの定義の変更および取得罪を盛り込んだ民主党案が提出されたが、いずれも衆議院解散に伴い廃案になった。しかし、二〇一四年には児童ポルノの単純所持禁止を盛り込んだ改正児童ポルノ禁止法が可決され七月一日に施行された。自主的な廃棄を促すため、施行から一年は罰則がつかない。自身の性的欲求を満たすために児童ポルノ（デジタル画像含む）を持つていた場合には罰せられるが、学術研究が目的なら罰則はないという。

成立直後は漫画などの創作物も規制の対象になるという話が出たが、漫画家や作家の反対が相次ぎ、規制の対象に創作物は含まれないことになったという。

また、二〇一〇年に話題になった東京都青少年健全育成条例改正案についても触れたい。児童ポルノ法が創作物を規制の対象にしなかったのに対し、この法案では創作物に登場する一八歳未満のキャラクターが「非実在青少年」と定義され、内容によっては規制の対象になる。そのため、多くの作家から表現の自由の侵害であると反対声明が出された。有川も反対声明を出した作家のひとりである。有川は自身のブログで「私は予言者になりたくて『図書館戦争』書いたんじゃない」とコメントした。

二つの法案は、メディア良化法程ではないにしろ、表現の自由が損なわれる可能性を持つ法律である。多くの作家が反対している中で、少しでも強引な規制が行われるようになると『図書館戦争』シリーズの世界が現実のものになってしまうだろう。それだけは避けたい限りである。

おわりに

『図書館戦争』シリーズを研究して、改めて言論の自由や表現の自由など私たちが当たり前だと思っていることが如何に必要なことであるか、またSFのジャンルの多さや奥深さを

知ることが出来た。

「図書館の自由に関する宣言」がどのような成り立ちで誕生して今日存在しているか、図書館の仕組みはどのようなものになっているかが分かり、図書館の役割を知りたい機会があった。

また、この論文を書いている最中にフランスで新聞社を襲ったテロ事件が発生した。イスラム過激派によるもので、教祖ムハンマドの風刺画を掲載したことに対しての報復だったという。

フランスや世界各地で、表現の自由が脅かされるとデモ活動が起き、襲撃された新聞社もテロには屈しないと翌週の週刊紙にはまたイスラム教の教祖・ムハンマドの風刺画を掲載し、表現の自由の大切さを訴えた。

表現の自由は非常に定義が曖昧であり、時としては表現の自由を笠に着てやりすぎだと思ってしまう。今回犯行に及んだイスラム教徒たちからしたら、掲載された風刺画を見て自分たちの教祖が侮辱されたと感じたかもしれない。また、日本でも紅白歌合戦で行われたサザンオールスターズのパフォーマンスが物議をかもししている。

『図書館戦争』シリーズを研究して、今まで無関心だった自衛隊や表現・言論の自由について学ぶことが出来た。日本の検閲の歴史や世界の表現の自由に関する法律についても知りたいと思つた。また、日本の国防の歴史についても知りたいと思う。今後も自身で調べながら理解を深め、今自分が生きている日本について、自身の意見をきちんといえるような大人になりたい。

(註)

(1) 飯田一史 「エンタメ・SF・ファンタジイの構造第2回「楽」と「哀」を満たす

SF(?) 作品―有川浩『図書館戦争』 『SFマガジン』二〇一四(平成二六)

年五月 早川書房 90〜99頁

(2) 小森健太郎 「モノドロギーからみた『図書館戦争』 『サブカルチャー戦争』

二〇一〇(平成二二)年二月 南雲書堂 135頁〜156頁

(3) 藤間真・家禰淳一・志保田務(図書館奉仕研究グループ) 『図書館戦争シリーズの表現に関する図書館情報学的考察』 『図書館界』通号三四一―号 二〇〇八(平成二二)年七月 142頁〜152頁

(4) 安里のり子・アンドリュウ・ウエルトハイマー・根本彰 「小説『図書館戦争』と『図書館の自由に関する宣言』の成立」 『日本図書館情報学会誌』 通号一八五号 二〇一三(平成二五)年三月 19頁〜32頁

(5) 新田将久「なにもをもってデイストピアとするのか―デイストピア作品を用いたデイストピア要素の分析―」 群馬大学社会学部卒業論文

http://www.si.gunma-u.ac.jp/~politics/lec/semipapers.html

(6) 『空飛ぶ広報室』から―私、自衛隊の味方です』 『歴史通』二七号 ワック 二〇一三年 154〜165頁

参考資料

・『SF事典』横田順禰 広済堂出版 昭和五二年

・『SF本の雑誌』別冊本の雑誌 本の雑誌編集部 本の雑誌社 二〇〇九年

・『ユートピアの歴史』グレゴリー・グレイス 東洋書林 二〇一三年

・『自衛隊ユニフォームと装備一〇〇!』あかぎひろゆき 光人社 二〇〇五年

・『自衛隊装備年鑑二〇一二―二〇一三』朝雲新聞社編集部 朝雲新聞社 二〇一二年

・『自衛隊装備年鑑二〇一三―二〇一四』朝雲新聞社編集部 朝雲新聞社 二〇一三年

・『図解雑学 自衛隊』高貴布士・斎木伸生・田村尚也 ナツメ社 二〇〇四年

・『陸自マニア!』別冊ベストカー 三推社 講談社 二〇〇七年

・『銃 ハンドガン・サブマシンガン』岩堂憲人 小学館 昭和五七年

- ・『イラク自衛隊「戦闘記」』佐藤正久 講談社 二〇〇七年
- ・『宮崎勤事件 塗りつぶされたシナリオ』一橋文哉 新潮社 二〇〇一年
- ・『ひびくらしのなく頃に』が殺人事件を引き起こしたのか?——東京大学特任講師・吉田正高氏に聞く』Jcastニュースビジネス&メディアアウオッチ 二〇〇八年
(<http://www.j-cast.com/2008/02/12016568.html?p=all>) 二〇一四年十二月一日閲覧
- ・「漫画・アニメの「非実在青少年」も対象に 東京都の青少年育成条例改正案」ITmedia ニュース (<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1003/09/news103.html>) 二〇一五年一月一五日閲覧
- ・岡田一郎「京都青少年の健全な育成に関する条例改定にまつわる動き」メールマガジン「オクタ」
(<http://www.alter-magazine.jp/index.php?%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD%E9%9D%92%E5%B0%91%E5%B9%B4%E3%81%AE%E5%81%A5%E5%85%A8%E3%81%AA%E3%82%B2%E6%88%90%E3%81%AB%E9%6%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E6%9D%A1%E4%BE%8B%E6%94%B9%E5%AB%9A%E3%81%AB%E3%81%AF%E3%82%8F%E3%82%8B%E5%8B%95%E3%81%8D>) 二〇一五年一月一六日閲覧